

橋本次郎

そして猿は山へ帰る／サウンドアート



山城町を舞台に、そこで聴こえる音の風景(サウンドスケープ)を題材とする。音を巡る旅を重ねながら人々の息遣いに寄り添った。屋根裏に凝縮された世界があった。

襟草丁

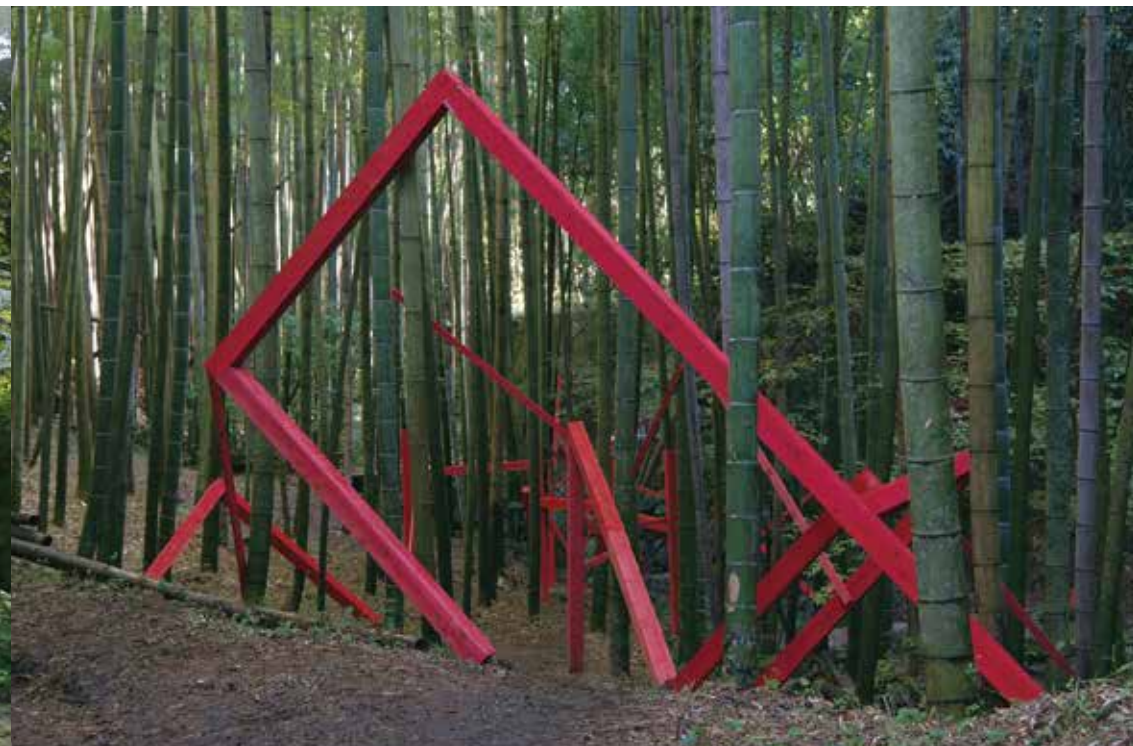
やまつみ／和紙にペン、水彩、糸による平面作品



和紙に細かく描いた文様、その上からの繊細な刺繍。随所に散りばめられた山城を表すモチーフには、山河と共生してきた人々の暮らし、自然への畏怖と恩恵の念を込めた。



針金を編んだ螺旋状の造形は、内から外側の空間へと回帰性を持つ形状。中庭に吊された作品が陽の光を反射し、古民家や竹林を巻き込んで幻想的世界を作り出した。



木材を使って縦横無尽に構造物を構想、新たな関係や繋がりを再構築する。竹藪の小路の先、作品によって導かれた異空間には、音・光・色・空気との対話が待っていた。

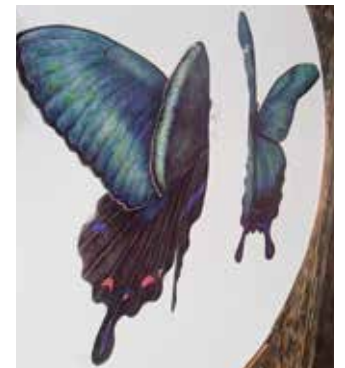
花本幸

精霊 / 陶磁器



近藤正和

wall and opened window / 平面・立体



古く日本書紀にも記されている綺原座の神社から、作家はやおよろずの神さまと戯れる精霊を創造した。陽の光がつくる影は刻々と変化し、寓話の世界へと誘い込む。

320×200cm 紙の上に油性ボールペン(黒青赤緑の基本4色のみ)、水性ペン(黄色)、樹脂、バーニッシュ、孟宗竹(山城町)、木廃材(藤原邸)を炭化处理して利用
竹材協力: NPO法人 加茂女 / NPO法人 京都発・竹・流域環境ネット
画材提供: ホルベイン工業(株)

植島啓司・八木良太(招待作家)

水の神センサー／インスタレーション



木津川流域の歴史に触れ「水の神の現代的な形」を探った。360度全天球動画で木津川の水に満たされたような空間を作り、その中を散策する体験型作品。

佐藤隼

空間収集—木津 / 世界—／インスタレーション・大量の虫



死んでしまった多くの事柄(多くは昆虫の死骸で構成される)を収集し、閉じ込め、並べ、物語化する。地元の有志と共に山城地域を歩き採集作業を重ねた。



絵の中の構成物は少ない。そぎ落とされた空間は普遍的のようだが、しかし確実にこれらは山城の風景。地元の作家ならではの視点が光る。

木津川アート2016終了後、解体され新しく建て替わる山川邸。音と映像によって、この場所に流れてきたこれまでの時間、流れていくであろうこれからの時間を可視化した。

浅山美由紀

そして、新たに生まれる。／インスタレーション(白い糸による空間作品)



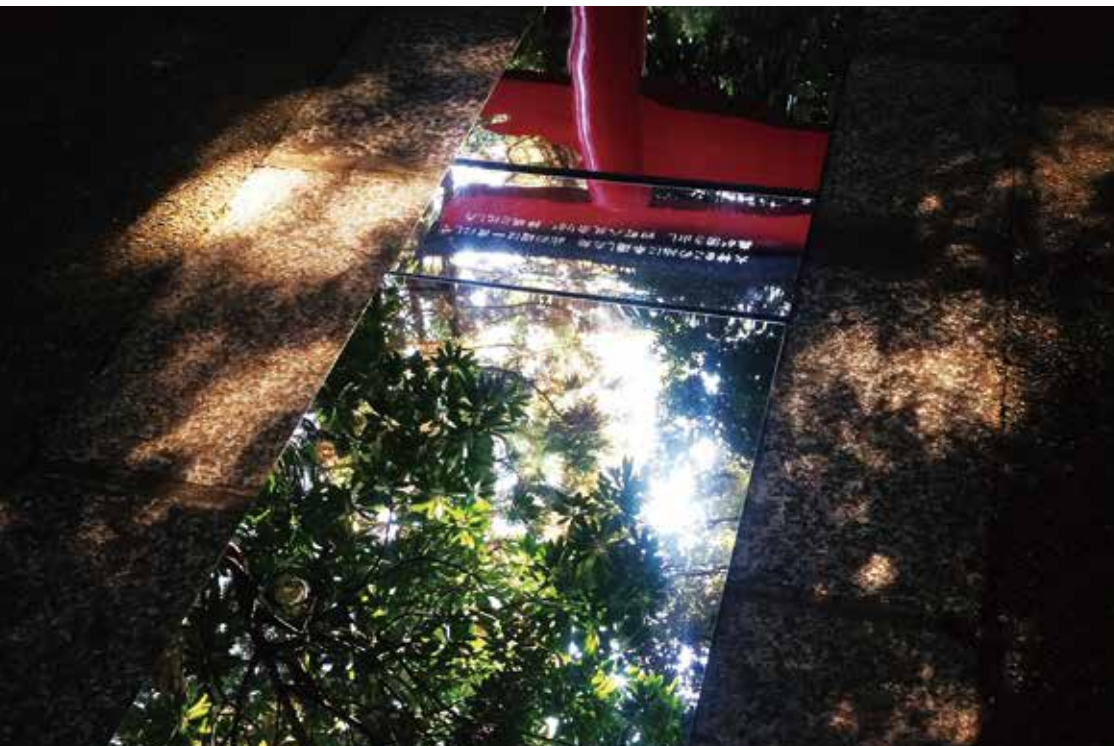
白い糸は、空間や人を包み込む繭の糸。膨らみの中から新しいのちが生まれ、次へ繋がっていくイメージを表現した。新しく建て替えられる山川邸へのメッセージでもあった。

小野崎理香

ゆめゆめわすれぬゆめ／立体



いのちが地上からはなれて新しいかたちとなって戻るその日まで、ふわふわとした感触につつまれながら旅をする姿を想像した。静かな春日神社の小さなファンタジー。



一帯の祭りを今も忠実に伝える涌出宮。山城の秋空とイチイガシの森を映す鏡に、枯れることのない水を表現。そこには「いのち」を巡るいくつかの物語が刻まれていた。



駅の伝言板の存在が新鮮。そこに描かれたブタ。誰もが自由に絵や文字を足したり消したりする行為にこだわった。イメージを受け取り繋いでいく無心の行為に。



巨大な首飾りと重たい首飾り。玉のひとつひとつは緑の惑星を表している。首にかけることの出来ない首飾りはスケールを失ったまま宇宙へ。



事務所、倉庫などが集まる複合施設全体を回廊とみため、彷徨い歩きながら絵を解いていく。最終地点までの全ての事象がアートに見えた。

竹中洋平

癒／音



ハピドラムの即興演奏。期間中、ほぼすべての展示会場にて演奏を果たした。その音色は空間とその場にいる人々をつなぎ合わせ、特別な時間を演出した。

城戸みゆき

推測せよ、いつもしているように／インスタレーション



ホテルというある種非日常の世界を舞台に、日常の水面下に潜む可能性を探った。「樋野展子×ヤンジャ」コラボレーションなど、狭小な空間でのライブも果敢に挑戦。

小牧徳満

a stage for... 今、この場所に立っている / 立体・環境彫刻



白い円錐台形のキャンバスには、太陽が昇り沈むまで刻々と移り変わる草木のシルエットが投影された。眼下に広がる山城の景観もまた人々の心に焼き付けられた。

長谷川政弘(招待作家)

風の道 / 金属造形



椿井大塚山古墳、かつては棚田のような水田があったという。黄金の稲穂が風を受けゆらゆら揺れるさまは、山城の土地がいのちを繋いできた歴史を讃えているようだ。



ろうそくに火を灯し、鑑賞者の手前へそと捧げ火を見つめてもらう。終了後、地元に寄り添った手作りの茶器、茶托などの道具で、お茶のおもてなしを毎日届けた。

町そのものが「いのちを有するもの」と仮定し、生命線、活動、細胞、個性と思えるような場所を写真で表現してみた。「明暗」「光と影」「白と黒」を生死の象徴とした。

佐々木紘子

瞬く風景／インスタレーション



透明の球体に浮かび上がる木津川の風景を、きらきらと瞬く星空になぞる。青写真による星座づくりワークショップで、地元の方々が制作した作品も展示された。

奥中章人

相互・世界・山河蛟 Inter-world-serpentine / 水と空気の柔らかい彫刻
そうご せかい さんがみずち



山城の豊かな山河を偲び、一匹の大きな水霊をイメージした。水と空気の上にて体感する知覚的な鑑賞作品。「木津川アート賞」「市民賞」のダブル受賞。

香月美菜

one stroke / 絵画



深淵が、宇宙に解き放たれたのか。鑑賞者に委ねられた自由を楽しむ。その一方で作家が森川邸農具小屋で費やした時間には、一撃となりうるほどの意義と重量があった。

田島悠史+渡邊哲意

宝塚大学新宿キャンパス学外連携室
stat(u)es / プロジェクションマッピング



鑑賞者の表情を借りて、「茶箱」を使った仏様の表情がうつろう。山城の木像が「たぐさんのいのちの源泉」であることを感じられる作品を目指した。



戦前からある穀物倉庫の中に、五色の光で鑑賞者の影を浮かび上がらせた。一瞬に現れ変容し消えていく像に、木津川とともに生きた人々の祈りや感情を重ね合わせる。

生体がつま一生の記憶の形として残る形骸・骨格を扱い、「記憶の潜在に問いかける装置」を制作した。導入部の映像は重要な役割を果たし、さまざまな思考を起こさせた。

松井ゆめ

ほかけぶねにろをおす/インスタレーション



帆掛け舟はかつて木津川を賑わせていた舟運文化の象徴。この街で生きる人々を思い創り上げた。折り舟制作には多くの市民の協力があった。「市長賞」受賞。

19 山本邸

多鹿宏毅

Color Field / 紙による造形



秋の山本邸の庭をイメージ、作家は赤を選んだ。黄色から赤へのグラデーションは、縁側から差し込む陽の光によって、さまざまな表情を見せた。

19 山本邸 39

成田直子

光をすくう、時をうつす／写真



作家のプライベートな物語を写真によって観る者と接続し共有する。母の死とそれ以降の時間、過去と現在、モノクロとカラー。裏庭に出た瞬間の光は明らかに意味を持った。